

報告 1

天皇誕生日の記念レセプション新潟市も出展

12 月 11 日、北京の日本大使館で天皇誕生日の記念レセプションが行われました。中国外務省の張昆生次官補、在北京各国大使館関係者など約 700 名が来場しました。

日本の魅力を PR するため、お茶室、試食ブース、観光ブース、商品展示ブースを設け、各地方自治体や 40 社以上の日系企業などが参加しました。新潟市も新潟県と一緒に、自治体 PR ブースの中で観光ポスター、観光パンフレット、紙風船、トッキッキグッズなどによる PR をしました。

試食ブースでは日本酒、豚丼、牛タン、焼き鳥等各県の特産品や栗、羊羹、調味料など来場者に振舞っていました。ANA（全日空）は 25 周年グッズを配付したり、JAL（日本航空）は入れたてコーヒーを出したり、日産は車の展示、ヤマハは電動自転車などを展示しました。また、お茶室にはたくさんの外国人で賑わい日本の茶道文化を楽しんでいました。

今回の天皇誕生日の記念レセプションをきっかけに、日本のことをもっと知ってもらい、日本の良さを充分に感じる事ができたと思います。もうすぐ、新しい年を迎えますが、来年には日中関係が改善の方向へ向かうことをお祈りいたします。（李）



天皇誕生日レセプションブース配置図



主要会場（開場前）



新潟市展示ブース



開始前の試食会場様子

報告 2

2012 国際動漫博覧会 開催

12月1日から9日まで、中国北京市郊外の蟹島国際展覽センターでアニメ・マンガの見本市「2012 国際動漫博覧会（ICAC 北京 2012）」が開催されました。同イベントは中国文化部、北京市人民政府、中国人民対外友好協会が主催、期間中の来場者数は8万人を超え、過去に北京で開催されたアニメ・マンガのイベントとしては最大規模の動員数となりました。イベント公式サイトなどによると、海外からはアメリカ、日本、フランス、韓国などからアニメ・マンガ関連の出版社30社余り、映像関係会社50社余りが出展したとのこと。日中関係の悪化などから、日本からの参加は若干規模が縮小されたものの、出版社やアニメ制作会社など22社が出展したとのこと。早速会場へ視察に行ってきました。

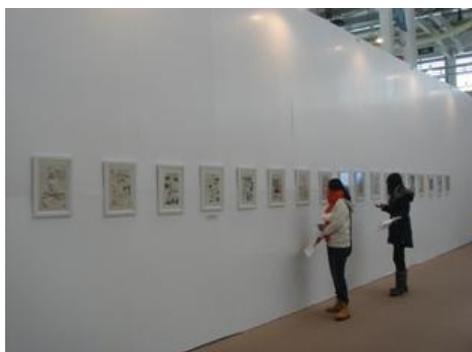
日本館では「ゴルゴ13」で有名な「さいとう・たかを複製原画展」、「手塚治虫複製原画展」、「EVA原画展」などが設けられており、個人的には子供の頃にテレビアニメなどで親しんだ手塚治虫の複製原画に興味を引かれましたが、「EVA原画展」の方が多くの来場者を引き付けていた感じました。特に「EVA原画展」では、原画の展示以外にもアニメの制作過程なども詳しく解説されており、多くの若者が熱心に見入っていました。中国の若者がアニメの制作過程を知る機会などなかなかないので、興味深かったのでしょうか。また、展示以外にも会場ではアニメ映画や短編映画が上映され、アニメ・マンガのキャラクターグッズなども販売されていました。

中国の総人口13億人のうち、アニメ・マンガ市場の消費者は約5億人、市場は1兆5000億円と日本を超える規模だと言われています。しかし、中国は日本と比べアニメ・マンガは“子供のもの”というイメージがまだまだ強くあります。一方で子供の頃に「ドラゴンボール」などの日本のアニメ・マンガを見て育った層が現在成人しており、今後中国においてもアニメ・マンガのファン層が拡大していくことが期待されています。

中国は自国のアニメ・マンガ産業の振興という国策の関係で海外からのアニメ・マンガ作品の輸入を制限しており、輸入にあたっての審査も非常に厳しいようです。また、中国は日本と比べ、アニメ産業の商流が日本ほどに成熟していません。例えば日本の場合まず最初にマンガ雑誌で作品の連載があり、それが単行本になり、人気作品はアニメ化・映画化され、その中でキャラクターグッズなどがヒットするという一連のアニメ・マンガビジネスのチャンネルがありますが、中国の場合各ビジネスが単発的で散漫なようです。

日本のアニメ・マンガ市場は少子高齢化のため、他の市場同様、将来的に縮小していくことが予想されます。今後、日本は中国市場に日本製コンテンツをそのまま売り込むだけでなく、中国のマンガ家やアニメーター、制作会社と共同で、中国の国情や市場に合わせ

た作品を製作し、また同時に作品の配信、キャラクターグッズの販売といったアニメ産業のビジネスモデルや流通チャネルの構築までも含めた形で日本のノウハウを売り込んでいくことが期待されます。(笠原)



複製原画に見入る来場者



日本館



フィギュアの展示

報告 3

全国日本人交流会とその後の北京の様子

第17回全国日本人交流会が11月13日、北京市内のホテルで開かれました。中国各地22地域の商工会・日本人会等の団体及び日本大使館、中国日本商会、北京日本人会合せて240人を超える関係者が集まり、現状などを報告し合いました。折しも、日中関係が大きな影響を受けている時の開催となり、参加者は各地の実情を知る良い機会となりました。



交流会閉会の挨拶の中で、中国日本商会の小関会長は、「絆」を大切にし、チーム Japan でこの難局に立ち向かいたい、と呼び掛けました。

参加した地域：天津、廊坊(河北省)、武漢、成都、雲南、瀋陽、大連、長春、黒龍江、青島、済南、上海、南京、南通(江蘇省)、蘇州、寧波、広州、深圳、アモイ、東莞(広東省)、広西、香港、北京。

当時は軒並み日中の地方自治体間の文化・スポーツ交流等が中止、延期されるなどしましたが、最近少しずつ変化が見られるようになりました。

11月3日、徳島県は上海で「徳島県 ACDC (Anime, Cosplay, Dance, Cinema) アニメ交流会」と題するイベントを開催、市民に徳島の魅力を伝えました。ここ北京でも12月7日、第8回日本業務食材展示会の併催という形で「第1回山形県産食品展示会 in 北京」が開かれました。山形県も共催団体に入り、県内企業6社(酒類5社、食品1社)が日本酒、サクランボの果実酒、そばなどを展示、訪れた和食店関係者などに商品を説明していました。久しぶりの食品展示会のためか、主催者の予想を上回る関係者が会場を訪れたとのこと。

また、日本政府観光局北京事務所も日本への観光客誘致につなげるため、近く市内で日本のイメージ広告を出す予定と聞いています。

徐々にはありますが往来促進につながるような催事が行われたり、日本のPR広告が復活しつつあります。(近藤)